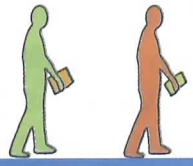
図書だより

呉工業高等専門学校　図書委員会

2003/11/14　No.43

Not digital.　It's analog.



目次

巻頭文

自伝，伝記のおもしろさ …… 校長　福　永　秀　春　2

読書感想文＆随想

『白球残映』（赤瀬川隼著）を読んで …… M１　下村　孔人　3
『鉄道員』（浅田次郎著）を読んで …… C２　藤川　善弘　3
『戦争を記憶する』（藤原帰一著）を読んで …… A３　村中　郁美　4
『ブレイブ・ストーリー』（宮部みゆき著）を読んで …… M４　日野　靖子　5
お勧めの本『第六大陸』（小川一水著） …… E４　佐々木　豊　5
『豊臣家の人々』（司馬遼太郎著）を読んで …… 専攻科　建設工学１年　光井　周平　6

留学生が紹介する外国の図書館

ベトナムの図書館 …… C３　ヴゥ ヴァ ダット　6

新任教職員の随想

「読書のすすめ」 …… 電気情報工学科　野村　博昭　7
「読書のすすめ」 …… 環境都市工学科　森脇　武夫　7
「一応，読書のすすめ」 …… 環境都市工学科　堀口　至　8
「東京での３年間と図書館」 …… 建築学科　篠部　裕　8

在外研究員報告

外国の図書館紹介 …… 建築学科　石井　仁　9

新着図書10選 …… 10～11

お知らせ …… 12

1　平成14年度　図書館利用状況について
2　おすすめ図書100選について
3　貸出図書ベスト５，視聴覚資料ベスト５

編集後記 …… 図書館長補　井上　浩孝　12

巻　頭　文

自伝，伝記のおもしろさ

校　長
福　永　秀　春

幼いころ，母親に手を引かれた子供は，お母さん，あれなーに，あれどうしたの？を連発して育つ。見る物とか見える現象にだれもが非常に好奇心を持つのである。やがて小学校にあがると，あれなーにと聞くことは少なくなって，現象に対する友だちの考えや反応，大人の対応など人つまり人格に好奇心が移り，時として人に尊敬の念をいだくようになる。これは人の成長過程である。人によってきっかけはいろいろあるだろうが，私の場合小学校の先生がちょっと話したのを聞いて，野口英世の自伝を読んだ。いわずとも彼は日本の生んだ偉大な細菌学者である。福島県の農家で幼いころいろりで手をひどくやけどしたことから，苦学して明治時代の医術開業試験に合格，のちにロックフェラー研究所に行ってすぐれた業績をあげた。アフリカにおいて病魔をふるっていた黄熱病源を研究中，これに感染して死んだことはあまりにも有名である。私には，やけどでくっついた５本の指を幼くしてナイフを持ち，自ら切り開いて人並みの姿になろうとした彼の意思，そして無知ではいけない医者になろうとした彼の意思に強烈な共感を覚え，勉強せないかんと思ったことだった。何か功をなした科学者・発明家，芸術家，はては実業家などの自伝や伝記ものを読んだ。それは自身の進行中の人生において少なからずインパクトを与えるもので，読後感がすがすがしい。学生諸君には，興味をいだく人の伝記を読むことを薦める。

長い間教職についているとこんな経験もある。あるとき学生がレーサーになって車をぶっとばし，Ｆ１で優勝したいから学校をやめるという相談があった。目標をもって邁進することは良いことだ。だがレーサーは努力だけでは成功しない。もって生まれた五感の鋭さというか素質が要るので，ミカ・ハッキネンの伝記を一回読んで，考え直してみなさいと話したら，その学生は夏休み後学業に復帰していた。たしかに伝記ものは自己の現在未来を比較推察させる功罪がある。

もう一つ，本校で低学年の受持ち担任が行う学生指導を契機に読んだ自叙伝では，著者の気力の強さに感銘した。著者は現在弁護士の大平光代である。中学校のとき転校したのがきっかけで，学級でいじめにあった彼女は，登校拒否から自殺未遂をはかり，いわゆる不良少女となって非行をくり返し，どん底を経験する。22歳のときクラブで仕事中，父の友人とめぐり遭う。諭されて過去を断ち切る決意の末に一念発起し，猛烈に勉強して中学校もまともに卒業していないのにあの難関中の難関司法試験を１回で合格する。尋常ではとてもできない偉業を成し遂げたと思う。タイトルを"だからあなたも生きぬいて"という。まさに生きぬくという読後感がすがすがしい。講談社から文庫版が出ている。高学年の諸君にも一読をすすめたい。

一度本を読むと，その内容を人に話して聞かせることがよい。それは話言葉で伝えるので，だらだらと話すことはできない。いかに簡潔にまとめるかのよい訓練になるし，自分が感銘を受けた点をいかに力点をおいて話のなかに組みこむかの訓練になる。相手があまりよい反応を示さなければ，もう一度別の人に話してみなさい。自伝はその格好の読み物だと思う。

読書感想文

白球残映（第113回直木賞）

赤瀬川 隼 著

機械工学科１年
下　村　孔　人

自分は，第百十三回直木賞を受賞した赤瀬川隼の「白球残映」を読んだ。この本は，赤瀬川隼が雑誌に発表していたものを加えた作品集で，「ほとほと…」「夜行列車」「陽炎球場」「春の挽歌」「消えたエース」の五つの作品から成り立っている。

今まで漫画ぐらいしか読まず，進んでこういう本には手をつけなかった。読む時といえば，今回のように課題でしかたなく読むぐらいだった。それに芥川賞や直木賞などを受賞する作品は，堅いイメージがあり，避けていた。自分は今日初めて直木賞を受賞した作品を読んだが，正直驚いた。読んでいくにつれおもしろ味が増し，どんどん引かれていった。

「ほとほと…」は，中学三年生が主人公の恋の話で，普通との違いは，恋心を抱く相手が実の母親の妹，つまり叔母にあたる人だということだ。同級生の女子でもなく，知り合いの女性でもない。「肉親に恋する」ということからどんな話が生まれてくるのかと，気になりながら読んでいた。「夜行列車」は，青年のやりたいこと，東大受験をするまでのことを中心に書かれた作品だ。銀行に勤めていながら東大を受験し，そのために危険を犯し大学の寮に潜入し，勉強する。銀行には好意を寄せる女性もいた。それでも父親が重病だと嘘をついてまで休暇をとり，勉学に励む。この青年の結末が知りたくなるおもしろい作品だ。「陽炎球場」は，親友同士の二人がそれぞれの迷いをお互いに解決していくというものだ。一人は，今勤めている会社に残るか，プロ野球の世界に入るか。もう一人は，昔とは違う今の会社を辞めるか否か。そしてそれぞれ答えを出し，その道を進む。二人が互いに支え合う話なので，個人的には好きなストーリだった。「春の挽歌」は，父の通夜に，以前世話になったという人達がやってくる話だ。家族は，父がひとの世話になったり，力添えを仰いだりすることはあったが，反対に他人に力を貸すことはないと思っていた。この作品は興味をそそられた。家族が知らない父の秘密が語られていき，父の素顔が見えてくる。普段の父とは違うもう一人の父。そこに引かれていく話だ。最後の作品である「消えたエース」は，この「白球残映」の作品の中で最もおもしろいと思い，引かれた話である。三十年程前に突然プロ野球を引退したエースを，一人の元記者が偶然見つけたことから話は始まる。元記者は尊敬する元エースの突然の引退理由を聞こうとするが，何も話してくれず，逆に誤解を受ける。やっとのことで聞き出した理由は意外なものだった。この意外な理由がこの作品を際立たせていると思う。

この本は野球を連想させる言葉がいくつか出てくる。このことから赤瀬川隼が野球に対して，思い入れがあるのだと思い，読むのが楽しくなっていた。この本を読めてよかったと思う。普通におもしろかった。

鉄道員（ぽっぽや）（第117回直木賞）

浅田 次郎 著

環境都市工学科２年
藤　川　善　弘

久しぶりにこの本を読んだ。何年か前に母親が買って来たのをちらっと読んだだけだった。この本は短編集で八話の話からなっているのだが，その時はたしか小学生高学年くらいの時で，意味が分からず，一番はじめの短編「鉄道員」だけを読んですぐに飽きてしまった。母親はこの本を読んで泣いていたが，一回目に読んだ時は本に興味がなくて，感動なんてひとつもせずに本を閉じた。それが今になって読んでみると，感動で心が一杯になった。小学校の頃には気づかなかった，奥の方に秘められている主題のようなものが，少しつかめた気がした。今回は全ての短編を読んでみたが，やはり「鉄道員」が一番感動した。

この話は，廃線が決定している，北海道のあるローカル線の終点の駅に勤める，勤続四十五年の，仕事一筋に生きてきた駅長，佐藤乙松のもとに，幼くして死んでしまった娘の雪子が，成長した姿を見せるために，幽霊になって帰ってくるという話だ。

初めて読んだ時には，何を伝えたいのかが全くわからなかった。幽霊になった雪子を不気味に思うくらいだった。だが今回は違った。乙松が自分自身の父親の姿と重なり，その父の事を考えると涙が止まらなくなった。私の父は金属会社に勤めていて，何年かに一度は地方にある工場に転勤を命じられる。たいていの工場は田舎の不便な所にあるので，父は何度も単身赴任を経験している。小さい頃からそれが当たり前だったので，僕や，

たぶん姉も，父の印象というものが結構薄い。しかし，最近大ゲンカをして，「お前なんか父親だと思ってない。」と，ずいぶんひどい事を言ってしまった時に，目を真っ赤にした父に，「私だって仕事がなければお前たちと暮らしたかった。」と言われた。印象に残るような事はしてくれてなかったけれど，見えない所で無理して我慢しながら働いてくれていたんだと思った。それまでは印象に残るような事をしてくれるような父親を，良い父親だと思っていた。だが，雪子が死んだ時に黙々と仕事をしていた乙松を，妻が責めた時に言った「したって，俺はポッポヤだから，どうすることもできんでしょ。」というセリフで，どこの家の父親も子供の事を考えながらも仕事をがんばっているんだと考えさせられた。また，雪子が「自分の正体がバレたときに，おっかながると思ったから」と言い訳をした時に，乙松が，「自分の子供をおっかながる親がいる訳ない」と言ったのも心に響いた。子供を愛さない親はいないんだなと思った。どんな子供であっても自分の子供であれば無条件に愛することができるのだろう。

近年，幼児虐待が増えているが，絶対に許せない。自分の子供を愛せないのなら子供を産むべきではないと思う。僕の父は，表面的には少しも面白みがなく，特別厳しいわけでも，優しいわけでもないが，男の誇りをもって家族や会社のために命を削って（大げさかもしれないが，本当に）働いている。直接的ではないが，すごい愛を感じる。この本を読んで大事な事に気付かされた。大ゲンカをした後，意地をはって謝れなかったので，今度帰って来た時に謝ろうと思う。そして，自分が父親になった時に本当に，子供を愛せる父親になりたい。

戦争を記憶する

藤原 帰一 著

建築学科３年
村　中　郁　美

1995年頃，アメリカで原爆投下に関する展示が企画された。しかし，「この展示では原爆投下を否定する見解が紹介される」という情報が流れ，退役軍人団体や議会などから反対運動が起こり，結局展示は中止となった。これに対して日本では，広島の悲劇を伝えよ，歴史をねじ曲げるなという声が挙がったが，アメリカで原爆展に反対した人々からも，歴史をねじ曲げるな，原爆投下によって多くの人命が救われたのだという主張があった。

冒頭で紹介されているこの話を読んで，同じ事柄について，全く反対の主張が生まれることもあるのだという当たり前のことに改めて気付かされた。たしかに，自分の信じる正義がなければ，一度に何十万もの命を奪うようなことはできないだろうとは思うが，それでも原爆投下は「悲劇」と考えるのが当然だと思っていたからだ。

原爆投下はアメリカでは「正戦」に含まれ，日本では「反戦」の出発点になった，とこの本には書かれている。原爆に限らず「正戦」「反戦」という言葉が度々使われているが，読めば読むほど，考えれば考えるほど，どちらかが正しいというものではないのだと思えてくる。二つとも正しく，二つとも間違っているのではないだろうか。たとえば，「独裁政権から解放されて嬉しい」というイラク人の声を聞くと，今回のイラク戦争は良い結果をもたらしたと思えるが，劣化ウラン弾の被害などを考えると，戦争を起こすべきではなかったとも思う。

ただ，どちらがより良いかとなると，私はやはり「反戦」の方だろうと思う。

「正戦」とは不条理な暴力には立ち向かわなければならない，守るためには戦わないといけないこともある，という考えだ。しかし同時に，多数を守るために少数を犠牲にする考えでもあるように思う。また，攻撃を加える相手や手段をしっかり考えなければ，不条理な暴力に不条理な暴力で対抗するだけになりかねない。原爆投下によって戦争が終結したのは事実だが，爆発が起きた瞬間に何万もの命が，文字どおり「消えて」なくなってしまったのも事実だ。さらに言うと，守るために危険の種をすべて滅ぼす，となってしまうと，もはや「正しい戦争」ではなくなってしまうだろう。

「反戦」は戦争そのものを絶対悪とする考え方である。どんな理由であれ，戦争を起こすことは許されない。戦いになれば必ず犠牲者は出てしまう。生き残ったとしても戦争による傷痕は，被害者には当然残るし，加害者側にも一生消えない罪悪感として残ってしまうのではないだろうか。推測しかできないけれど，いくら大義名分の下で正当化されているからといっても，結局は人殺しだという思いからは逃れきれないだろうと思うからだ。だから，戦争それ自体が無くなればいい。ごく簡単に言うと，「反戦」とはそういうことだと思う。けれども，それはあくまで理想でしかない。想いを貫くためには力が必要になるというのが現状だと思う。

沖縄戦による死者の名前が，国籍や軍人・市民を問わずわかる限りすべて刻まれている慰霊碑が沖縄南部にあるそうだ。ただ死者を悼む気持ちの表れで，それが戦争の後に残るものの本質だと思う。敵とか味方とか，そういったことにとらわれず，人の死を悼む気持ちを忘れずにいられたら，想いそのものが力になるような，「反戦」という理想が自然と実現するのかもしれない。

ブレイブ・ストーリー

宮部 みゆき 著

機械工学科４年
日　野　靖　子

皆さんは今まで考えたことすらなかった，つらいことや悲しいことが身に振りかかったらどうするだろうか。現実から目をそらして，どうして自分にだけこんなことが起こるんだろうとか，運命を変えられたらいいのにと思う人もいるのではないだろうか。この物語の主人公ワタルもその一人である。

ワタルの場合，願いをかなえることができる世界「幻界」に旅立ち，仲間とともに願いをかなえる旅に出て，もう少しで願いをかなえられるところまできた。しかし，願いをかなえるには「幻界」の人々に自分が味わった悲しみをもたらさなければならないということが分かってしまう。

もしあなたがワタルならばどうするのだろうか。自分の願いをどんなことをしてでもかなえたいから，幻界の人々に悲しみや，苦しみをもたらしたとしてもかなえようとするだろうか。私なら，やはり誰を犠牲にしたとしても，願いをかなえようとするかもしれない。しかし，ワタルは自身の願いではなく，幻界の人々のための願いをかなえてしまう。

なぜ，ワタルは自身の願いではなく，幻界の人々のための願いをかなえたのだろうか。確かに，今自分の願いをかなえたら，一時的にはつらいことや悲しいことから逃れることができるだろう。しかし，人生につらいことや悲しいことは一度しか起こらないというわけではない。むしろ何度もあるだろう。そんなとき，ただただ自分の身の上を嘆き，目をそらすのではなく，その事実を受け入れ，これからの自分を自分で決めていく，そのことが大切なのではないか。

所詮お話の中だし，現実の人生においてはそうそううまくいかない，と言う人もいるかもしれない。けれど，実際の人生において自分で考え決めることは，自己責任の重要さがうたわれる社会で生きていく上でも大切なのではないだろうか。

第六大陸

小川 一水 著

電気工学科４年
佐々木　　豊

『第六大陸』とは，民間企業による月面開発計画の名前である。西暦2025年。ヒマラヤ，南極，深海などの極限の環境下での建設事業で実績のある御鳥羽総合建設が受注した前例のない計画の名前だ。工期10年，予算1500億で月面に有人商業基地を建設する。宇宙もののSFとしては，月の話というのはもう古典の域である。しかし，NASAやJAXAのような国の機関が行うのではない，民間企業による月面開発計画というのがとても新鮮な部分である。民間で宇宙事業というのはかなり無理のある話なのだ。なぜなら宇宙事業というのは，予算の限られた民間企業にとってあまりにもリスクが大きすぎるのだ。それを実現しようとする人々を描いた小説だ。

この本の面白いところは，作者の綿密な調査に基づいてすべてをとても現実的に書いていることである。月の過酷な環境や，現地調査に行った月面の中国基地での生活，地球から月までの資材・人の輸送について，軌道上を破壊的な速度で回っている人工衛星の残骸などの宇宙ごみ（スペースデブリ）－特にレーダーで捉えられない１インチの魔物（ワンインチ・デビル）－の恐怖。さらには国際法の壁やNASAとの争いまで。それがシュミレーションといってもいい位のリアルさで描かれている。

さらに，計画を取り巻く人々の群像劇がまた面白い。月面開発に燃える技術者，それを率いる経営者たち，宇宙を目指す人々の友情，施工主の真の目的，計画に反対する人々との戦いなどのドラマが，物語のリアルさを飾っている。それらのドラマが，物語をより面白くし，読みやすいものにしている。

特に，技術者たちの苦悩と根性は勉強になると思う。僕らのほとんどは技術者になるのだ。ある意味，必読かもしれない。

豊臣家の人々

司馬 遼太郎 著

専攻科 建設工学１年
光 井 周 平

私はいわゆる文学小説というものを読むことが苦手で，読書といえばいつも時代小説を読んでいる。この『豊臣家の人々』は，ずいぶん前に確か古書店で見つけて買ったものだ。毎日忙しい中で本を読むことなど随分していなかったが，青春18きっぷで旅をしながらの読書はなかなか楽しかった。

豊臣秀吉といえば，歴史好きでなくとも一度は聞いたはずの名前であると思う。歴史の教科書に必ず出てくるこの時代の人物といえば，織田信長・徳川家康，そしてこの豊臣秀吉である。なかでも秀吉の人気は高い。百姓の子が武士になり，大名になり，挙句の果てには天下人になってしまう。この激動の人生に，多くの人々は魅力を感じるのだろうか。

この秀吉にももちろん家族がいて，兄弟がいて，親戚がいた。自分の親戚が突然出世したことで，自らの人生まで大きく変わってしまったこの『豊臣家の人々』。秀吉の華やかさと比べると，この人々の一生は悲劇である。

この中でも私は「殺生関白」が心に残った。秀吉の甥，豊臣秀次の話である。彼も秀吉と同じで百姓の子であり，秀吉の出世に伴って武士になった，というよりは秀吉によって武士にされた，と言うべきか。秀吉に子がいなかったことからその養子となり，関白にまでなるが，秀吉に子・秀頼が生まれるや，妻子もろとも秀吉に殺されてしまう。百姓の身分で普通の暮らしをするはずだった人が，一人の親戚によって突如として自分の運命を狂わされる。華やかな歴史の影に，このような悲劇がいくつもあるのである。

秀吉一代によって築かれ，秀吉の死後わずか17年で滅びた豊臣家。その歴史には華やかな表面とは別の，人の心をひきつけるもう一つの物語がある。

留学生が紹介する外国の図書館

ベトナムの図書館

環境都市工学科３年
ヴゥ ヴァ ダット

図書館といえば皆さんはどんな建物と思っていますか？もう一つはどうして多くの人がよくそこへ行っていますか？何か面白いことがありますか？知識に役立ちますか？誰でも知っているのは図書館にいろいろな分野の本や雑誌や新聞や教科書などがあり，特に大きな図書館ではパソコンもインターネットも使えます。学生は学校の授業以外図書館で参考書も読めるし，ニュースも知れるし，もしくは漫画で楽しめるでしょう。一般人は知識を広げるチャンスがあります。

私は日本に来る前大学の二年生でした。その大学の図書館について話して行きます。図書館は学校から自転車で十五分行ったところに建てられた四階の大きな建物です。前面は広いスペースがあり，その中は木の下にベンチが集まっていて，後ろは学生のための寮があります。図書館は一階に毎日の新聞，雑誌，漫画が棚にちゃんと置かれており，ここはEntertainment階といいます。残りの階は専門の本をきちんと並べてあり，例えば科学，経済，プログラミング，歴史，社会，構造力学，環境となっています。三階は先生たちの研究のため，残りは学生が勉強するところです。一般人も入れますが，図書館に入るときは図書員に図書カードを見せることになっています。学校は授業が午前までなので，午後図書館に入ると学生たちがいっぱい入っていて強い勉強したい感じがします。図書カードを作ってもらっている人誰でも本を借りることができますが五冊以内場合は一冊あたり30000VND（VND＝ベトナム通貨）を一応預けていますが，本を返したらそのお金を返してもらえます。私は高校生の時図書館へあまり行っていなかったですが大学に行ったあと図書館が大事なものと分かってきて一週間に３回ほど行っていました。

新任教職員の随想

読書のすすめ

電気情報工学科
野　村　博　昭

典型的な理系人間である私は，古今東西の名著，名作に通じているとは，およそ言い難い読書歴しかないのが実情であるが，それでも昔は今のように様々な形態の娯楽に満ちた環境ではなかったため，読書が何よりの娯楽だったように思う。トーマス・マンの「魔の山」やマルタン・デュ・ガールの「チボー家の人々」といったような作品を，さして読書家でもない私でも普通に読んでいた。

本をあまり読まない人というのは，心を揺さぶられる本や，お気に入りの作家に出会うといった，本を好きになるきっかけに恵まれていないのだと思う。そういう人には，とにかく大作にぶつかってみなさいと言いたい。私の青春時代，多くの若者を本の面白さに目覚めさせたパール・バックの「大地」など薦めたいところだが，近頃の夏休みの読書感想文などであまり見かけないところをみると，今の若い諸君にはとっつきにくいのだろうか。ならば，最近はよりエンターテイメント色の濃いものが好まれるようなので，宮部みゆきの「模倣犯」などどうだろう。昨今の秀作ミステリの中でも群を抜く分厚さの上下二巻。しかも中は二段組み。本を読み慣れない人なら手に取るのも恐ろしくなる文句なしのボリュームである。しかし，こういうストーリー性のあるものは，読み始めればスピードにのってどんどん読める。そして，読破した暁には読み終えた満足感と，これほどの長編をこなすことが出来たという自信で，本に対する尻込みもなくなっているはずである。

インターネットの普及で，自分のパソコンに書籍をダウンロードしてクリックしながら読むという形がとられつつあり，そうすれば家にかさばる本を置いておく必要もなく，近い将来，本はなくなるという説もあるようだが，それはどうだろう。本棚に並べてある，昔読んだ本を手にとってパラパラと頁をめくると，その本の内容だけでなく，それを読んでいた頃の自分が蘇ってくる。頁をめくる手がもどかしくなる思いで没頭して本を読む楽しみを知っている人がいる限り，本という形はなくならないように思う。

読書のすすめ

環境都市工学科
森　脇　武　夫

これまでに多くの人に読書のすすめを聞かされていると思います。ここで改めて読書のすすめを書いても仕方がありませんが，私の読書遍歴と読書スタイルを紹介し，読書の魅力を少しでも理解してもらえればと思います。

私の少年時代は読書の嫌いな子供で，本を読むのは読書感想文の宿題が出たときだけでした。そんな私が突然読書に目覚めたのは中学３年生の夏で，知人宅に転がっていた五木寛之の「さらばモスクワ愚連隊」を何気なく読み始めたら，その面白さに引き込まれ，借りて帰り，あっという間に読破したのが私の実質的な読書の始まりです。

それ以来，読書が苦痛でなくなり，楽しみに変わり，自分から進んで多くの本を読むようになりました。 特に高専時代は2〜3日に１冊のペースで読み漁りました。 読書にはいろいろなスタイルがありますが，私の読書は作家を中心に読むタイプで，気に入った作家を見つけてその作家の作品を片っ端から読む方です。 高専時代によく読んだ作家は，五木寛之，井上靖，五味川純平，司馬遼太郎，芹沢光治良，松本清張，山本周五郎，横溝正史などで，ジャンルはばらばらです。 このほかにも，池波正太郎，内田康夫，新田次郎，藤沢周平，デック・フランシスなどお気に入りの作家は大勢いますが，最近のお気に入りは宮城谷昌光で，新刊本が出ると必ず読んでいます。

最後に，読書の効能について私の考えを記して終わりにします。 人の一生は正に１回きりですが，本を読むと読んだ本の数，登場人物の数，あるいは書いた作家の数だけ他の人生を疑似体験することができます。 映画やテレビでも同じような体験はできますが，映画やテレビの場合の主体は送り手であり，見る側は画像として与えられた情報を一方的に受け取るだけです。 一方，本の場合の主体は読み手であり，読む者のペースで拾い読み，熟読，読み直し，反芻したりし，活字で与えられた情報を元に自分でイメージを自由に創造することができます。 そして，このような過程を通して，主人公の人生を体験したり，作家の考えを共有したりできるので，読書によって多くの人生を体験し，１回しかない自分の人生を豊かなものしてくれます。

一応，読書のすすめ

環境都市工学科
堀口　至

普段はあまり本を読みませんが，飛行機や新幹線といった長時間の移動の時は（広島－安芸阿賀間も長いですね），必ず本屋に寄ります。読書は格好の暇つぶしになります。

しかし，私も以前は読書が勉強の一種であると思っていました。いわゆる名作という奴を買って，何ページか読んで本棚にしまうという非常に無駄なことをしていました。ですが，ある時新聞か雑誌かで『2，3ページ読んで面白いと思わない本はたとえ名作であっても読む必要はない』という記事を読み，「あぁそれでいいんだ」と思った記憶があります。それからは特に読書を勉強などとは考えずに趣味の一種ととらえ，面白そうだなと思った本だけを読むことにしています。

読書が苦手だと思っている人は，読書を難しく考えすぎてはいませんか？読書のきっかけを自ら潰していませんか？読書の取り掛かりは何でも良いと思います。私の読書の理由は「暇だから」です。軽い気持ちで本を手にとってみてください。ちなみに私の本選びは結構いい加減で，本の持つなんとなくの雰囲気で選んでいます。まず本のタイトルと装丁。これが私の本選びの大半を占めます。そしてぱらぱらとめくって面白そうと思ったら（読むわけではありません）その本を買います。こんな選び方なので結構はずします。でもめげずにこの方法で本を選び，何人か好きな作家が出来ました。好きな作家が出来ればその人が書いた本を読んでいきます。そして再び新規開拓する場合はまた同じ方法で本を選びます。

読書は勉強ではありません。趣味の一環と言っていいでしょう（反論はあるかもしれませんが）。とりあえず本屋に行ってみませんか？

東京での３年間と図書館

建築学科
篠部　裕

前任地の文部科学省では，教科書を調査することが仕事であったため，図書館はよく利用した。国立国会図書館，国土交通省図書館，日本建築学会図書館，土木学会図書館など様々である。

本省職員であった当時は，国立国会図書館の利用に関しては便宜を図られた。通常，一般利用者として利用する場合は，１冊の本を取り出すのに１時間近く待たなければならないが，職員窓口を利用すれば，わずか15分程度で本を取り出し閲覧できる。更に仕事上必要な本は１ヶ月間の貸し出しも可能であった。これは仕事をする上で大変便利であったが，今となってはこの手は使えない。

また，建築学会の図書館もよく利用した。地方で働く者にとってこの学会図書館の利用は，上京の際に限られるが，当時の勤務地の霞ヶ関から図書館のある田町までは30分。東京在任の３年間はフルに活用させて頂いた。

一方，週末になると官舎近くの公立図書館を活用した。以前呉高専に勤務していた頃は通勤時間も約10分と短かったが，東京在任中の通勤時間は長い。片道約１時間15分。電車に乗っている時間が約１時間弱。この通勤時間の活用は，千葉都民の私にとっては大きなテーマだ。通勤時間に読むべき本を確保するために，週末には図書館を訪れコンパクトな文庫本を数冊まとめて借りた。最初は，書店で興味のある本などを買っていたが，図書費もばかにならない。リユースに努めるべく，ＢＯＯＫ○○○という古本屋で買ったりもしたが，結局，図書館で借りることに落ち着いた。ただ，最新の本は予約者も多く，なかなか読めない。

また，都立日比谷図書館もよく利用した。この図書館は本省から徒歩で10分の場所にある。日比谷公園の敷地の一角にあり，季節毎に彩られる花壇はとても美しい。この公立図書館は，専門雑誌類もかなり充実しており，新建築，建築文化，住宅特集，日経アーキテクチュア，日経コンストラクションなどがそろっている。仕事で疲れた頭をリフレッシュするのには，良い施設であった。

この４月から再び地方勤務となり，図書館との付き合い方も大きく変わることとなった。現在，週末には散歩を兼ねて，子どもと一緒に自転車で呉市中央図書館に行っている。呉市での図書館との新しい付き合い方を一つずつ見つけていきたい。

在外研究員報告

外国の図書館紹介

建築学科講師　石　井　　仁

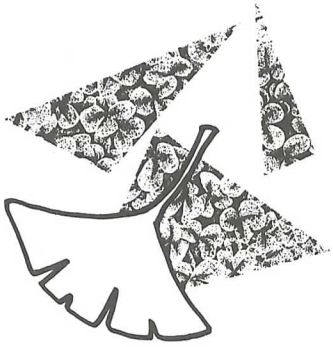
フライブルク大学の図書館を紹介する前に，はじめにフライブルク市の概況を説明します。近年，日本でも環境首都やソーラー首都として紹介される機会が増えたフライブルクですが，地理的には，フランスとスイスとの国境にほど近いドイツ南西部に位置し，市東部にはシュバルツバルト（黒い森）が広がっています。人口は，約20万人と呉市とほぼ等しいのですが，全人口に占める学生人口の比率は１割強，主幹産業も大学またはそれに関連する教育・研究機関であり大学と共に街があります。また日本のキャンパスのイメージとは程遠く，大学の教育・研究施設は街のいたる所に点在しており，まさに街と大学が共存している大学都市の様相を呈しています。

この様な大学都市において，集積された知識の中枢を担っているのがフライブルク大学の図書館です。図書館施設としては，旧市街（中心部）の入口に位置しているメインの図書館がありますが，街に点在する様々な教育・研究施設や大学病院内にも付属の図書館があります。そしてこれら図書館の蔵書延べ冊数は約340万冊であり，呉高専図書館のおよそ50倍弱にあたる蔵書数です。大学の開学が日本の室町時代とかなり古いため，古文書のような図書も数多く存在しています。

▲ 館内検索スペースおよび閲覧スペース（上部）

メインの図書館を訪れると，図書施設以外に会議室，企画展示スペース，カフェがあり，また大学の歴史的遺物が展示されていて，さながら小規模な文化施設といった感じです。館内は，書籍を閲覧している学生やパソコンで書籍検索を行っている学生で賑わっています。無料でインターネットが出来る端末があるなど図書館が市民に広く開放されているため，学生以外の人々も数多く訪れています。立地条件からして大学の付属図書館というより，呉市中央図書館のような公共の図書館としての印象を強く受ける図書館です。

▲ フライブルク大学図書館



新着図書10選

バカの壁

養老孟司著　新潮社

「話せばわかる」「個性を伸ばそう」「日々変化する情報」「私自身は変わらない」。これらの言葉に違和感を感じる人はあまりいないだろう。ところが，この本を読むと，これらが誤った認識によるものであることがわかってくる。「バカの壁」を作っている人にいくら話しても，わかってもらえない。個性を制限するからこそ社会が成り立つ。情報じたいは不変であるが，受け取る人間は日々変化し続ける。……まさに目からウロコ，である。

（小助川　元太記）

質問力：話し上手はここがちがう

齋藤孝著　筑摩書房

「どんな研究をしているの？」と聞かれたので，言葉を選び一所懸命に説明したのに，「へえー，難しいことをやっているんだぁ」で片付けられてしまうことがよくある。「わかろうとする気がないなら最初から質問するな！」と思う。逆に，まったくの専門外なのに，本質を突く鋭い質問で，こちらが考えもしなかった視点に気付かせてくれる人もいる。このように，不毛な会話から卒業し，有意義で楽しいコミュニケーションを目指したいあなたにお薦めの一冊だ。

（小助川　元太記）

急性中毒診療マニュアル

関洲二著　金原出版

地下鉄サリン，カレー・ヒ素など薬物事件が多発している。中毒物に関する良書は多いが，病因物質を鑑別する和書は見当たらない。また，病態全体をとらえながら個々の病態に対する治療の書も少ない。このような観点から，本書は中毒物質の鑑別を重視し，さらに病態を俯瞰・総括しながら治療法にも重点をおいている。専門的な内容だが，虫ささされなど日常に起こりうる中毒への対処法もあるので，一般学生にも役立つ一冊である。

（岩本　英久記）

MEの基礎知識と安全管理　改訂第4版

日本エム・イー学会ME技術教育委員会監修　南江堂

ME（医用工学）に興味をもつ学生のための書である。基礎編ではME全般と安全に関する基礎的知識を，応用編ではME機器ごとの原理・構成・構造，取り扱い上の注意，保守点検について，平易に解説している。さらには，IT，医療に必要な情報工学，内視鏡下治療，画像診断装置（CT，MRI，RIイメージング），インターベンション治療などの項目も説明している。最新技術に対応した知識を得ることができる，お勧めの一冊である。

（岩本　英久記）

C言語によるアルゴリズムとデータ構造

柴田望洋，辻亮介 著　ソフトバンクパブリッシング

本書は，現在広く使われているC言語を題材にして，アルゴリズムとデータ構造を学習するためのテキストである。アルゴリズムやデータ構造に関する書籍は，その性格上理論的なことを羅列して解説したものが多く，どうしても初心者には敷居が高いように感じられる。本書では，読者の立場にたってなるべく分かりやすく読み進めながら多角的な学習を行えるように配慮されている。本書を活用してプログラミング技術を習得して欲しい。

（井上　浩孝記）

わかりやすいパターン認識

石井健一郎ほか著　オーム社

膨大なデータの中から欲しい情報を即座に獲得する検索技術，文字情報から音声情報へといったメディア変換技術など，本格的なマルチメディア時代を迎えるにあたり，種々のメディアを効率的に処理しなくてはならない機会が急速に増えつつある。そのような要求にこたえるための基本技術がパターン認識である。本書はパターン認識を正しく理解するためにNTTの研究者によって懇切丁寧にわかりやすく書かれたものである。

（井上　浩孝記）

ウォーター：世界水戦争

マルク・ド・ヴィリエ著　共同通信社

水に恵まれた日本にいると，世界各地の水に関する問題を意識する機会はほとんどない。本書は，世界の水の問題を政治的な観点を中心に，歴史的背景なども踏まえて分かりやすく語っている。水の基本的な性質や水循環の解説などもあって理解しやすく，文章も読みやすい。本書は水問題を追いかけて著者とともに世界各地に旅する感覚にさせてくれる。楽しい旅とは言えないが，水を中心に各地域で抱える様々な問題も知ることができる。

（黒川　岳司記）

コンクリート夜話

山田順治著　セメント協会

この本は昭和45年５月～平成８年11月の間，雑誌「セメント工業」に掲載されていたコンクリートに関するエッセイ集です。コンクリートについて若干の基礎知識を必要としますが，「コンクリートの硬化に砂糖は禁物」，「セメントを酒やビールで練り混ぜたらどうなるか」といった軽い話から，「月面でのコンクリート工事」のような最新技術の話まで，軽い気持ちで楽しんで読むことが出来ると思います。

（堀口　　至記）

日本の都市の環境デザイン２

－北陸・中部・関西編－

都市環境デザイン会議編著　建築資料研究社

都市環境や町並みに興味を持つ都市環境デザイン会議のメンバーが，日本の各地の町並みについてその形成過程，構成，そして変遷について紹介している。今回は北陸・中部・関西の町並みを対象にしており，25の町並みと地区を紹介している。続編の第１巻「北海道・東北・関東編」，第３巻「中国・四国・九州・沖縄編」も楽しみである。

（岡本　二郎記）

空間演出

－世界の建築・都市デザイン－

日本建築学会編　井上書院

「空間演出」は世界の建築・都市デザインシリーズの２冊目として出版されている。最初に「空間体験」(1998)が発行され，最近，３冊目の「空間要素」が出版された。いずれも世界各地の建築・都市デザインの事例を３つの異なった視点で捉え，紹介している。

「空間演出」では空間の演出手法をシンメトリー，コントラストなど12の項目に分類し，76の事例が紹介されている。写真が多く，目を楽しませてくれる。是非，手に取ってみて下さい。

（岡本　二郎記）

購入希望図書について

図書館へ備え付けを希望する図書がありましたら，カウンターにある「購入希望図書申込書」に記入して，職員に渡して下さい。

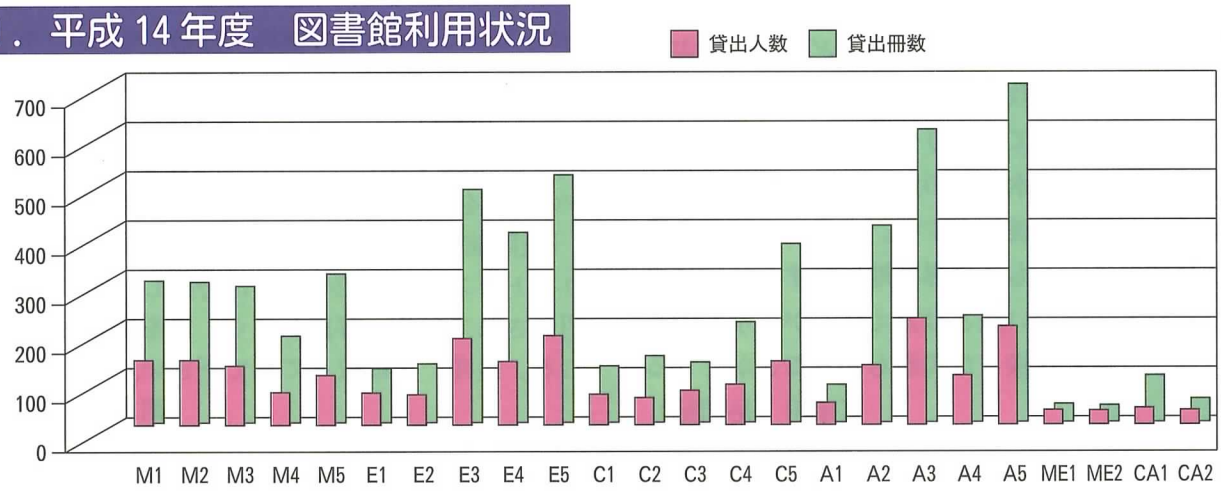
※必ず購入できるわけではありませんが，なるべく購入する様にしています。

書　名	著　者	出版社
神様のパズル	機本　伸司	角川
新装版　指輪物語　追補編	J.R.R. トールキン	評論社
女學校	岩井志麻子	マガジンハウス
ソーネチカ	リュドミラ・ウリツカヤ	新潮社
ユーモレスク	長野まゆみ	マガジンハウス
Mathcad キャンパス	臼田　ほか	森北出版
ファイバ・光通信	J.C. Palalais	森北出版
物質科学のための量子力学	市川　恒樹	三共出版
電験第２種一次試験「理論科目」合格予想問題集	電験問題研究会	電気書院
科目合格のためのデータベースマスタブック電験第２種　電力	電験問題研究会	電気書院
盗まれた記憶の博物館上，下	ラルフ・イーザウ	あすなろ書房
TOEIC Bridge 公式ガイド＆問題集	国際ビジネスコミュニケーション	国際ビジネスコミュニケーション
星々の舟	村山由佳	文藝春秋

☆最近購入したもののリスト（抜粋）です。

お　知　ら　せ

1．平成14年度　図書館利用状況



																					専機電		専建設	
学年学科	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	ME1	ME2	CA1	CA2
貸出人数	116	116	104	49	84	48	47	159	114	164	47	39	54	67	112	28	104	200	85	182	13	12	19	13
貸出冊数	277	274	266	162	291	99	107	461	373	492	104	125	110	192	350	62	388	582	206	673	28	24	84	39

2．おすすめ図書100選について

2003年４月から図書館閲覧室中央に「呉高専おすすめ図書100選」のコーナーを設けています。本（特に古典・名作）を読みたいけれども何を読んだら良いか分からない時は，この中から選んでみてはどうでしょうか。紹介文付きのリストを用意していますので，ご利用下さい。リストは図書館ホームページからも見る事が出来ます（URLは http://wwwlib.kure-nct.ac.jp/osusume.html）。

3．貸出図書ベスト５，視聴覚資料ベスト５（2003年度上半期）

○貸出図書ベスト５

1	青空のむこう
1	ハリーポッターと炎のゴブレット　下
1	天国の本屋
4	ハリーポッターと炎のゴブレット　上
4	黄昏のハンター（ダレンシャン　7）
4	Mathcadによる光システムの基礎

○視聴覚資料ベスト５

1	マトリックス
2	マイノリティ・リポート
2	ワイルド・スピード
4	モンスターズ・インク
4	突入せよ！「あさま山荘」事件

編　集　後　記

平成15年８月９日㈯，本校にて学校見学会が開催されました。図書館では催し物として「異文化展示コーナー」を設置し，教官方が留学や学会で外国に行かれた際に持ち帰られた写真，地図，絵葉書，おもちゃ等の展示と本校図書館所有のLD『世界の車窓から』の上映を行いました。多くの中学生、保護者，引率の先生に立ち寄って頂き，図書館をゆっくり見学して頂きました。中でも，綺麗な景色が写る双眼鏡は興味深げに覗かれていました。また，オックスフォード大学の食堂は『ハリー・ポッター』の，ドイツのお城は『シンデレラ』の世界でした。外国のさまざまな展示物をご覧になって，外国に行ってみたいと思われる方も多かったようで，評判もなかなか良かったようです。珍しい外国の展示物を提供して下さいました教官のみなさま，会場準備をして下さいました図書館長，図書係のみなさまに感謝いたします。

（図書館長補　井上　浩孝）

（表紙デザイン：専攻科・森　隆寛）